



高雄（5）—高雄市山岳部の歴史とサアロア族

片倉佳史（台湾在住作家）

高雄は台湾南部最大の都市であり、世界でも指折りの港湾都市でもある。市の中心部の人口は150万を誇り、台北に次ぐ台湾第二の都市である。今回は知られざる山岳部の歴史とサアロア（ラアルワ）族について紹介してみたい。

台湾原住民族の人々とその総称

台湾島の中央部には高峻な山々が連なっている。高雄市の市街地は広大な平野の辺部にあり、山岳とは無縁に思えてしまうが、2010年12月25日に旧高雄県が合併したことで、広大な山岳地域をも市域に取り込むこととなった。

こういった山岳地帯に暮らしているのは「原住民族」と呼ばれる人々である。清国統治時代から日本統治時代までは「蕃人」、「蕃族」、もしくは「生蕃」※と呼ばれ、昭和時代になって「高砂（たかさご）族」という呼称が与えられた。そして、戦後は中華民国の体制下、「山地人」、「山地同胞」などと呼ばれていた。

彼らは漢人系住民が中国大陸から渡ってくるよりも前から、台湾の地に暮らしていた人々である。現在はこういった人々を台湾華語（北京語）で「原住民（ユエンズーミン）」と呼ぶことが多い。これは彼ら自身の希望を踏まえ、差別感のない表現とされている。1994年8月1日に中華民国憲法で「山地同胞」は「原住民」と改められ、1997年7月21日には「原住民族」と改められた。

漢人系住民の会話では今も「原住民」の呼称が用いられることが多いが、興味深いのは、現地の人々の会話の中では日本語で「原住民族（ゲンジュウミンゾク）」、「高砂族（タカサゴゾク）」と、中高年世代を中心に日本語で表現されることが少なくないことである。

現在、台湾政府は16の族群を部族認定している。

後述するように、言語はより複雑で、細分化していけば、原住民族の固有語だけで50近い言語が存在する。しかし、興味深いことに、彼らの固有言語には漢人系住民に対して自らを総称する言葉が存在していない。多くの場合、國語（台湾華語）で「ユエンズーミン」、中高年世代が日本語で「ゲンジュウミンゾク」、「タカサゴゾク」と自称するのはこれが理由である。



台湾の原住民族は日本統治時代、高砂族と呼ばれていた。各部族に固有の言語があり、共通言語はなかった。また、高砂族という言葉も特定の部族を示してはいない。高雄市山岳部に暮らすブヌン族の人々。

※蕃人、蕃族、生蕃はいずれも差別感を含む表現である。特に生蕃はかなり強い差別感を帯びており、使用は好ましくない。ただし、本来、「蕃」の字は「蛮」と同義ではなく、草木が深く茂るという意味である。

「出草」の習慣をもつ人々

1895（明治28）年、日清戦争後に締結された下

関条約で、台湾は日本に割譲された。日本は台湾を新領土として捉え、統治するが、当然、山岳部に入れば、先住の人々との軋轢が生じる。

当時、原住民族の人々は「出草（首狩り）」の習慣を持っていた。すべての部族が出草をするわけではなく、台湾東部の平野部に暮らすアミ族や蘭嶼に暮らすタオ族には出草の習慣はない。しかし、多くの場合、強い縄張りの意識があり、侵入者は敵と見なす部族が多かった。

出草は「迷信による陋習」、もしくは「怨念に起因する残虐行為」と考えられることが多いが、多くの場合、出草は単なる復讐や仇討ちなどといった単純な動機ではなく、生活と密接な関わりをもつ風習だった。

その意味合いは部族によって異なるが、筆者がかつて取材した台湾の東北部、蘭陽溪上流の集落に住むアタヤル（タイヤル）族の長老は、出草する動機を以下のように答えた。拙著『観光コースでない台湾』（高文研）の記述に重複するが、以下に挙げておきたい。

- ・ 解決しない論争の決着を付けるとき
- ・ 自らにかかった嫌疑を晴らすとき
- ・ 冤罪を晴らしたいとき
- ・ 凶事を未然に防ぎたいとき
- ・ 少年が大人の仲間入りをするとき
- ・ 自らの武勇を示し、自己を誇りたいとき

なお、出草が成功するか否かは、すべて神霊の意思によるものとされていた。そして、出草後は、そのたびに祭事が催され、霊を慰める。そして、取ってきた首を手厚く首棚に安置する。つまり、自らの絶対的守護神として、崇めたのである。



原住民族の人々は集落を作って暮らしていた。日本統治時代と戦後に移住を強いられたケースも少なくない。高雄市茂林区の萬山(オポノホ・旧称マンタウラン)集落。

理蕃政策と隘勇線

日本は原住民族の人々に対し、あらゆる形で対応策を採った。これは「理蕃政策」と呼ばれた。日本統治時代以前、つまり、清国統治時代についても、対原住民族政策が採られていたが、漢人系住民と原住民族との間で衝突が起きないようにすることに主眼を置いた消極的なものだった。

日本統治時代に入ると、当初は、漢人系住民が暮らす地域を制圧することを優先していたため、第4代台湾総督の児玉源太郎の時代までは、とりたてて大きな動きはなかった。

台湾総督府による対原住民族政策が本格化したのは、第5代台湾総督の佐久間左馬太（さまた）の時代からである。佐久間は「理蕃総督」と呼ばれるほど、熱心に原住民族勢力と向かい合った。

台湾総督府は、「威嚇」と「撫化」を軸にした政策を採用した。1909（明治42）年には「五箇年理蕃計画」が立てられた。その中で重視されたのは原住民族から銃器を取り上げることで、実に、5年間に2万3千挺が押収された。この数は異様なまでに多く感じるが、これは清国官憲が台湾を離れる時に銃器弾薬を残していったからだと言われている。

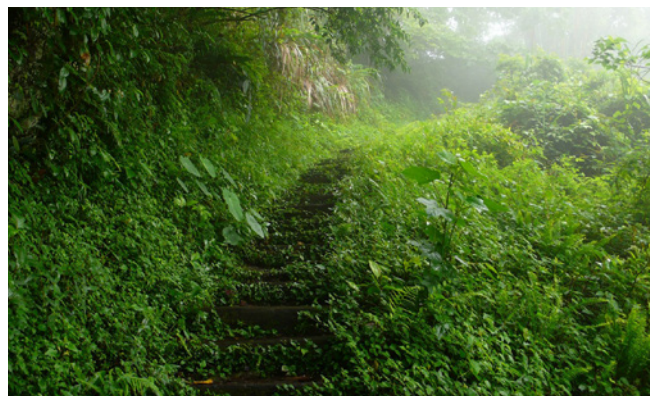
当然ながら、日本人は彼らが持つ出草の習慣を恐れた。そこで、彼らの勢力範囲を徐々に狭めていき、追い詰めた上で帰順を迫るという方法を

採った。武力行使はもちろんだが、同時に「隘勇線」と呼ばれるものを設け、彼らの生存範囲を狭めていくという手法が採られた。「隘勇」はいわゆる監視員のことで、「隘勇線」とは、これが線状に連なっている警戒線のことである。

隘勇線は原住民族の居住地域と、行政の実権が行き届いた地域との境界線である。両側 100 メートルほどは草木が刈られ、鉄条網を敷き、中には電流を流しているところや、地雷が埋設されているところもあった。これを徐々に山側に押し進めていくことで、総督府は原住民族の勢力を追い詰めていった。そして、食糧供給路を絶ち、餓死か降伏かを迫った。

隘勇の制度は清国統治時代に設けられたものだが、台湾総督府はこれを受け継ぎ、拡充していった。戦闘においても、近代的な装備を誇る台湾総督府側に対し、原住民族側の武器は、猟銃や槍、弓を基本としていた。また、集団的な戦闘に慣れておらず、統率も取れていない。そういった状況もあって、彼らは大規模な包囲作戦に圧迫され、追いつめられていった。

屈服する際は「帰順式」が執り行なわれた。銃器はすべて押収され、原住民族の人々は日本の統治体制の中に組み込まれた。その後、台湾総督府は道路を敷設し、警察官吏駐在所を置く。そして、派遣された警察官がその土地を管理する長となった。



現在、日本統治時代に整備された山岳道路は一部が遊歩道や登山歩道として整備されている。南投県信義郷に残る古道。



南部横貫公路。関山越えの山岳道路を整備したものだが、ルートが完全に一致するわけではない。現在、2009年の台風被害で、一部区間が不通。現在も修復工事は続いている。

警備道路（理蕃道路）を考える

こうして造られた道路は「警備道路」、もしくは「理蕃（りばん）道路」と呼ばれた。たとえば、台湾の東西を結んでいる山越えの道「南部横貫公路」は、日本統治時代の「関山越（かんざんごえ）警備道路」を再整備したものである（本稿執筆の時点では自然災害により一部区間が不通）。

この道路はブヌン族が暮らす地域を東西に貫くように伸びている。言うまでもなく、台湾総督府はブヌン族の勢力を管制し、監視するためにこの道路を設けた。この警備道路の南側には内本鹿越（ないほんろくごえ）警備道路、北側には八通関越（はつつうかんごえ）警備道路が設けられ、ブヌン族の居住地域を南北から挟み込むように圧迫していた。

これらの警備道路はブヌン族の勢力を確実に山奥へ追い上げていった。帰順した人々を移住させ、時には強制的に集落を遺棄させるということも行なわれた。こういったことも台湾の歴史を見ていく上で、見落としてはならない事実と言えるだろう。

なお、警備道路は原住民族の生活道路を拡充するか、清国統治時代の道路を再整備したものが前身となっていることが多い。特に、原住民族に対する包囲線である「隘勇線」が警備道路に連動することは多かった。隘勇線の総延長は時期によ

て変化するが、1909（明治 42）年の統計では 470 キロに達している。



南部横貫公路沿線は 2009 年 8 月 8 日の水害で大きな被害が出た。大量の土砂で埋まった谷の様子。



本稿執筆の時点では、南部横貫公路は梅山以東が不通となっている（台東側の向陽以遠は通行可能）。梅山はその名の示すように、梅の名所となっている。



婦順式の様子。原住民族の人々は隘勇線によって生存範囲を制限されていった。拙著『古写真が語る 台湾 日本統治時代の 50 年』（祥伝社）より転載。

台湾南部の「五十三次」

六亀（ろっき）警備道路についても紹介しておきたい。これは台湾南部で最初に設けられた警備道路であり、関山越警備道路の西側に繋がるものだった。現在は遺棄されており、道路としては機能していないが、非常に興味深い歴史を持っている。

六亀警備道路は現在の地名で言えば、高雄市の桃源区と茂林区を結んでいる。北端は現在の桃源区にあり、南端は茂林区の天津という集落にあった。桃源は日本統治時代、ガニ社と呼ばれていた（社は原住民族集落を意味する）。全長は 50 キロあまりで、この間に 53 箇所の駐在所が設置され、4 箇所の監督所が設けられていた。

六亀警備道路の敷設目的は原住民族を管制するだけではなかった。当時、とても重要視されていた樟腦の採取に従事する人々を原住民族の襲撃から守ることだった。当時、樟腦は台湾の特産品とされ、台湾総督府の重要な財源にもなっていた。

道路は尾根伝いに敷設されていた。西側には老濃溪が流れ、東側には濁口溪が流れている。その間にのびる山岳上に六亀の警備道路は設けられていた。言うまでもなく、隘勇線と連動しており、鉄条網が張り巡らされていた。

興味深いのは、もともと集落のない無人地帯に駐在所を設けたためか、地名が明らかに日本的な響きを持っていることである。たとえば、小田原山、吉田山、鳴海山、藤枝山といった山の名前は現在の地図にも記されており、網子山という山には括弧書きで「四日市」と記されている。

ここまで書くと、感覚の鋭い読者は、あることに気づくかもしれない。六亀警備道路の北の起点は「日本橋」という場所で、終点にあるのが「天津」である。そして、道中に 53 箇所の分駐所。もはや言うまでもあるまい。「東海道五十三次」の宿場町なのである。別掲の地図を見ていただくと分かるように、ガニ社の対岸に「日本橋」という地

名があり、派出所のマークが付けられている。その左下には小田原があり、沼津も見える。さらに蒲原や興津なども見える。全長50キロあまりの途上に移動者の便宜を図り、そして、安全を守るために分駐所を設け、それを東海道五十三次に見立てて名前を付けていたのである。

現在は警備道路そのものが廃止されているため、集落らしいものはないが、地名だけは現在の地図でもいくつかを確認できる。たとえば、北から小田原(9)、藤枝(22)、吉田(34)、御油(35)、鳴海(40)、桑名(42)、四日市(43)、石薬師(44)、大津(53)などは詳細な地図であれば確認が可能だ(括弧内の数字は宿場の番号)。

現在、この古道は遺棄されて久しい。しかし、登山やハイキングの愛好家たちの間ではそれなりに知られているようで、山歩きの散策コースになっている。いくつかの分駐所は家屋の土台と



日本統治時代の地図。六亀警備道路は破線で記されている。図中右上に日本橋が見え、左下に小田原、その下に沼津や蒲原、興津などが見える。また、中程に吉田(豊橋)が見える。



六亀警備道路上には上寶来、頭前山、バリサン、マガの4箇所に監督所が設けられていた。このうちマガは現在、茂林(マオリン)という名で集落を形成している。



六亀警備道路の南の起点は大津という集落だった。老濃溪の河岸に位置する。広大な河川敷が印象的だ。

なっていた石垣などが残っている。

昭和期に始まった台湾の産業開発

六亀警備道路の跡地は現在、藤枝国家森林遊楽区と扇平(さんびん)森林生態科学園の中に残っている。ここは日本統治時代、京都帝国大学農学部附属演習林の一部だった。

扇平では「キナ」の樹が植樹されていた。南米原産のこの植物の樹皮から、マラリアの特効薬「キニーネ」が精製される。現在も園内にはキナの樹が残る。

長らくキニーネの世界最大の産地はオランダ領インドネシアだったが、日中戦争の拡大や日米

通商航海条約の破棄などにより、インドネシアからの輸入が困難になった。これにより、日本は独自にキニーネを得る必要に迫られた。1940（昭和15）年9月13日には、第二次近衛内閣が小林一三（いちぞう）商工大臣をバタビア（ジャカルタ）に派遣し、オランダと交渉したが、決裂した。

これ以降、台湾には、総督府の意向を受けた内地資本が次々に入り込むこととなる。いずれも、熱帯性植物を中心とした農園を経営し、大きな利益を得た。

このあたりの状況については、故・平沢亀一郎氏の回顧録『台湾の山と私』に詳しい。平沢氏自身も総督府蕃地開発調査隊の一員として山地に入っており、貴重な証言が並んでいる。調査隊は1936（昭和11）年に組織され、台湾総督府の殖産局農務課と山林課、警務局、そして、研究機関、農林試験場などが連携を取り、台北帝国大学理農学部の奥田彥（おくだ・いく）がリーダーとなった。

台湾総督府はこの計画を重視し、平塚広義総務長官を議長とする会議を繰り返したと伝えられる。具体的な企画立案は台湾総督府が行ない、各事業者が資金と技術を提供する。土地は総督府が蕃地と呼ばれていた原住民族居住区の中から選定し、無償で用意する。そして、労働力はその地域の原住民族を出役させるというものだった。

1930年代は従来の「工業の日本、農業の台湾」という枠組みが解消され、台湾の工業発展が進められた時代である。これに連動する形で、内地（日本本土）の資本を台湾に取り込み、産業を発展させるという試みがなされた。軍事的な需要と絡み合いながら、内地企業は台湾総督府の補助を受け、台湾各地に大規模な農園経営を行なっていった。

以下に具体的な例を挙げるが、いずれも換金性の高い商品作物が多く、台湾総督府の後ろ盾もあり、大きな利益を生み出したと思われる。また、原住民族の集落では青年団が組織され、こういった農場での労働に若者たちがかり出されたが、例外なく賃金は低く抑えられていた。

台湾進出を果たした内地資本

まず、最重要課題となっていたキナについては、武田薬品が東大演習林のある台中州竹山から新高山（現称・玉山）の麓にわたる地域、また、塩野義製薬には高雄州のカピヤン社からクナナウ社にわたる地域、台湾拓殖会社も星一氏とともに星キナ産業株式会社を創設し、台東庁知本の近隣でキナの栽培を試みた。

除虫剤のトバ（デリス）は海軍の斡旋により下淡水溪沿岸部、天然ゴムは嘉義地方の山麓が産地となった。また、油桐（アブラギリ）は台中州の山麓や河岸段丘で栽植された。また、森永製菓は高雄州の屏東一帯でカカオ豆の栽培に成功した。

台湾東部においてはコーヒー豆の栽培が推進され、花蓮港（現・花蓮）の舞鶴台地に大阪住田物産株式会社（現・エム・シー・フーズ）が400ヘクタールという大農園を設け、1934（昭和9）年に初荷を大阪に搬送している。また、インスタントコーヒーの普及をはじめ、日本のコーヒー界を発展に導いた柴田文次は、木村コーヒー店（現・キーコーヒー）の農場を台東庁新港支庁と台南州嘉義郡に設け、大農園を経営した。

さらに、台湾北西部や中部では三井農林株式会社をはじめ、五島慶太を代表にいたく東横産業株式会社、持木興業合資会社などが紅茶の栽培を進めた。中でも三井農林は1927（昭和2）年に初の国産紅茶を発売し、話題となった。1930（昭和5）年にはブランド名を「日東紅茶」と改めている。

残念ながら、こういった企業経営型農場の大半は終戦と同時に台湾から撤退し、施設は中華民国政府に接收された。そして、新たな研究や開発が進められることもなく、多くの作物は廃れてしまった。日本統治時代末期に各種の栽培事業が勃興したという史実を残すのみとなっている。



花蓮県瑞穗郷の舞鶴台地では大阪住田物産株式会社が大きなコーヒー農園を設けていた。現在は茶葉栽培で知られている。



山肌を白く染めるアブラギリ（油桐）。日本統治時代末期に植樹が励行された。アブラギリから採れる油は現金収入となり、地域経済を支える地場産品として期待されていた。

マラリアと京都帝大演習林

マラリアは亜熱帯風土病である。台湾においては年中発生する疫病であり、日本統治下の台湾で最も恐れられていた病の一つである。台湾総督府が「台湾地方病と伝染病調査委員会」を設けたのが1899（明治32）年。それ以来、マラリアは台湾における病理学研究の中心に据え置かれる存在だった。

マラリアはハマダラ蚊によって媒介される。熱帯病の印象が強いが、日本にもあり、「瘧（おこり）」と呼ばれていた。しかし、沖縄を除くと、気候帯の関係で、ハマダラ蚊も少なく、症状も軽かったため、いわゆる大病の扱いは受けていなかった。

しかし、1871（明治4）年10月に宮古島の住民が台湾南部に漂着し、パイワン族の人々に殺害された事件をきっかけに、その猛威を思い知ることとなった。当時台湾の統治者だった清国を攻めた征台の役で、戦闘における死者がわずか12名だったものの、戦闘の終結後に発生したマラリアで、561名もの死者を出すことになった。これによってマラリアは広く知られるようになり、「台湾熱」という呼称が生まれた。

このマラリアをいかにして克服していくか。熱心に研究が進められたことは言うまでもあるまい。先にも述べたように、キナについてはインドネシアでの栽培が盛んだったが、南方進出を目論む日本にとっては、これを自給化することは不可欠だった。

そこで、比較的インドネシアの気候に近い台湾南部が選ばれ、京都帝国大学の演習林が置かれる。台湾総督府は1909（明治42）年11月に高雄州旗山郡下の土地を京都帝大に払い下げ、演習林の歴史が始まった。

治安が不安定だったこともあり、演習林が本格的な事業を始めたのは、開設からやや遅れて、1926（大正15）年となっている。事務所は当初、原住民族の襲撃を受けにくい六龜に置かれた。

当時の台湾には京都帝国大学以外に、東京帝国大学が台中州新高郡・竹山郡に、北海道帝国大学が台中州能高郡埔里街に、そして、九州帝国大学が台北州文山郡石碇庄に演習林を持っていた。中でも京都帝国大学の場合、その敷地が6万ヘクタールと広いことで知られていた。南北76キロ、東西18キロにおよび、また、西は低地にあって亜熱帯、東は最高地点が海拔3666メートルの関山（かんざん）なので、冷涼な気候帯も含まれる。当然、植生は幅広く、生育環境は豊かだった。

造林事業も熱心に進められ、チークやタガヤサンなど南方由来の樹木のほかに、日本から持ち込まれたスギの植樹も行なわれた。しかし、後者は気候が合わず、定着しなかった。

やはり、注目されていたのはキナである。キナは南米原産で、アカネ科に属する植物である。台湾にキナを持ち込んだのは東京帝国大学農学部で、これが京都帝国大学に譲渡された。扇平に苗圃が設けられたのは1927（昭和2）年のことだった。その後、1937（昭和12）年に事業拡大に伴い、作業所が開設される。その後も樹皮収蔵庫、乾燥場などが設けられた。職員は100人程度おり、キナの栽培地は400ヘクタールに達していたという。さらに、200名を越える高砂族奉公部隊（原住民族の青年団）がかり出され、皮剥や植え付けなどに従事していた。

国際環境の変化と戦況の悪化に伴い、台湾におけるキナの栽培は熱心に進められた。しかし、終戦を迎え、日本は台湾の領有権を放棄。日本人は台湾の地を去っていった。その後、各施設は中華民国政府に接収されたが、農園と作業所、研究施設は引き継がれた。そして、台湾のマラリア治療についても貢献を果たしていった。

サアロア族の集落を訪ねる

サアロア族は高雄市桃源区に暮らす人々で、人口はわずか371名という少数民族である※1。南部横貫公路の途上、荖濃溪上流一帯に暮らしている。中国語では「拉阿魯哇（ラルワ）」族と表記するが、本稿では部族語の発音に近い「サアロア」族と記したいと思う。

現在、サアロア族は台湾政府が認定している部族の中で、日月潭付近に暮らすサオ族（人口776名）や、近隣の高雄市那瑪夏区に暮らすカナカナプ族（人口321名・カナカナヴとも）と並び、人口最少の部族の一つとなっている。

独自の言語を有し、伝承や神話などについても独自のものをもつが、サアロア語を常用できるのはわずか十名程度と言われている。学校教育では政府が公用語とする「國語」（台湾式北京語）が用いられるため、若い世代はほとんど部族の言葉ができず、中高年世代においても、人口の多いブ

ヌン語を常用しており、まさに、言語消滅の危機にさらされている。

サアロア族とカナカナプ族は長らくツォウ族の一集団と見なされていた。ツォウ族は阿里山地区一帯に暮らしており、長らく、北ツォウ族と南ツォウ族に二分されてきたが、このうちの南ツォウ族と呼ばれていたのが、サアロア族とカナカナプ族である（2014年にそれぞれ政府から部族認定を受けている）。

なお、サアロア族は大きく四つの集落に分かれていたため、日本統治時代は「四社蕃（ししゃばん）」という呼ばれ方をしていた。また、ルカイ族の「下三社蕃（しもさんしゃばん）」※2に対し、「上四社蕃（かみししゃばん）」という呼称もあった。また、カナカナプ族には「簡仔霧」と漢字表記が与えられていた。

日本統治時代はツォウ族との文化的類似性が注目されていたが、実態は大きな相違がある。1918（大正7）年に出された『番族慣習調査報告書』によると、言語については阿里山周辺に暮らす北ツォウ族とサアロアやカナカナプとでは、明らかに異なり、両者の間にも大きな隔りがあるという。ただし、習俗や風貌は似ていると記されている。確かに、服装などを見ているかぎりでは判別はできず、三者の明確な区別は難しい印象だ。

また、過去において、北ツォウとサアロア・カナカナプとの間では戦闘もあり、強大な勢力を誇る北ツォウに対抗し、サアロアとカナカナプが連合するようになったという伝承も存在する。

※1 ここに挙げた部族の人口はいずれも行政院原住民族委員会の統計による。血統認定に差異があるため、いくつかの数字が存在する（2017年3月現在）。

※2 高雄市北部の茂林区に暮らす人々で、三つの集落に分かれて暮らしている。ルカイ族に分類されるのが一般的だが、言語は異なり、集落にそれぞれ言語がある状態である。また、

文化的にも独自性が強い。



六亀警備道路の北の起点にあたる地域がサアロア族の居住地域である。この一帯は例外なくブヌン族の人口が増えている。



現在、サアロア族はカナカナブ族とともに、独立した一部族として扱われており、部族文化の再興に努力している。なお、「hla alua」はサアロア（ラアルワ）のアルファベット表記。

部族の地位を獲得した人々

現在、サアロア族が暮らしているのは、パエチャナ（排剪）、ヴィラガン（美壠）、タリチア・タトカ（塔蠟）、シツァーラ（雁爾・旧称カルブンガ）の各集落である※。いずれもブヌン族との混住であり、住人のすべてがサアロア族というわけではない。

4つの集落はいずれも老濃溪によって形成された河岸段丘の上であり、ヴィラガンを除くと川の北側に位置している。ヴィラガンの住民は多くが高雄市那瑪夏区のマガ集落に移住しており、タリ

チアの住民もパエチャナに移住しているケースが多い。

かつて、サアロア族の居住地は広範だったが、1930年代から始まったとされるブヌン族の移入により、状況は変わった。各地で蜂起が起きていたこともあり、台湾総督府はブヌンの集団移住を推し進め、この地域にも断続的にブヌン族の移入が続いた。

これに伴って混血が進んだため、サアロアの人口は減少に転じる。そして、言語についても人口の多いブヌン語が首位言語となり、サアロア族の言語や伝統文化は消滅の危機に晒されるようになった。

転機となったのは1993年10月15日のことだった。台北市の国家戯劇院で台湾原住民族の伝統歌舞が披露された際、「ツォウ族」として参加したサアロアとカナカナブの人々は、皮肉にも、ここで阿里山一帯に暮らすツォウ族との文化の違いを実感したという。

つまり、このイベントを経て、自らのアイデンティティを再確認したのである。そして、部族の伝統文化の再興を真剣に考えるようになった。

その後も政府に対しての働きかけは続けられた。2011年5月30日、人々は行政院原住民族委員会に対し、正名要求を行なった。つまり、それまではツォウ族に組み込まれていた自らの存在をサアロア族として公的に認めさせる運動を起こしたのである。続いて翌年1月には、カナカナブの人々も同じく正名運動を始めた。

そして、部族認定を勝ち取った今、サアロアの人々は自らの言語、文化の復興と発展を目指している。その中心人物となっているアマラナマシュ（漢名游仁貴）氏は、まずは言語の保存と、部族の意識を高める教育が急務であるとし、努力を続けているという。

特に言語を保持していくことは、多くの困難が伴うのも事実だ。現在、400名に満たない人口の中、血統を守っているのはわずか200名ほどに過

ぎないという現実もある。それでも、自らが受け継いできた伝統を守り、後世に伝えていこうとする人々の思いは強い。今後の動きに注目したいところである。

サアロア（ラアルワ）族の集落

Paiciansa パエチャナ 排剪

Vilanganu ヴィラガン 美瓏

Talicia タリチア・タトカ 塔蠟

Hlihlara シツァーラ 雁爾

※サアロア語の発音は非常に複雑で、カタカナ表記は日本統治時代の文献を参考にし、同時に現地の発音に則した。



サアロア族の人々は先祖伝来の固有文化として、戦後長らく途絶えていた祭祀「ミアトゥグス」を復活させた。



ミアトゥグスは毎年2月頃に開かれる。厳格なしきたりに従って儀式は進む。



アマラナマシュ（游仁貴）氏はサアロア族文化の再興に熱心に取り組んでいる。伝承や昔話も興味深いものがある。

聖なる貝を祀る「ミアトゥグス」

最後に、ミアトゥグスを紹介しておきたい。これは他の部族には見られないサアロア族独自の祭典がある。聖なる存在とされる貝を祀る儀式で、漢字では「聖貝祭」、もしくは「貝神祭」と表記する。

この祭典の起源は、部族に伝わる神話にまで遡る。太古の昔、サアロア族は東の方角にある「タスガ」と呼ばれる土地に住んでいた。ここで祖先たちは「カヴルア」と呼ばれる小人（こびと）と出会い、共に暮らしていたという※。

しかし、サアロアの人々はタスガの地を離れることになり、その別れを惜しんだカヴルアは自分たちが大切にしていた貝を授けたという。人々はこれを「タキヤル（聖なる貝）」と名付け、移住した先で祭典を行なうようになった。この祭事がミアトゥグスである。

この「聖なる貝」は全部で12個あり、それぞ

れに意味がある。通常は頭目（酋長）が管理し、瓶の中に安置し、土中に埋めてある。この時、タキヤルは瓶の中にはなく、故地であるタスガに里帰りをする。しかし、ミアトゥグスの10日前、祭典の準備が始まる時には、瓶の中にタキヤルは戻っているという。

この祭典は1950年を最後に一度は断絶し、1993年に部族文化の復興を目指して復活した。現在は先祖から受け継いできた文化を守るために欠かせない行事とされている。毎年2月下旬に開かれる。

祭事は元来、集落ごとに行なっていたが、現在は各集落が共有する特設会場で開かれる。会場の中央にはタブライシアと呼ばれる集会所が設けられ、ここは神聖なる空間とされる。タブライシアは女人禁制で、マカリカリ（長老会議）はここで行なわれる。

儀礼にはいくつかの規則がある。まず、ミアトゥグスは全員参加が原則で、子供は輪の中に入ることが許されない。飼っている動物を必ず檻に入れ、部外者は例外なく祭事に入ってはならない。また、常に身なりを整えていなければならない。服飾品が地に落ちると命を失うという言い伝えもあり、思いのほか厳格だ。

参観だけなら可能なので、機会があれば、訪れてみたいところである。

※サアロア族に限らず、台湾の原住民族の伝承の中にはこういった小人（こびと）が登場することがある。多くの場合、原住民族の人々よりも以前に台湾に暮らしていたという存在であることが多い。ただし、小人伝説を持たない部族もある。



衣装などはツォウ族に通じるものがあるものの、文化的独自性は強い。現在は母語教育が熱心に行なわれている。



ミアトゥグスは毎年2月頃に開かれる。厳格なしきたりに従って儀式は進む。



サアロア族の集会所「タブライシア」。女性の進入は許されない。長老会議はここで行なう。